

## 第4章 交際の心得

### 1 煤<sup>すす</sup>けた人と交われれば

煤けた人と交われれば自分も黒くなる。(エピクテトス)

#### ——霧の中を行けば——

秋の高原。朝霧の中を行くと知らず知らずのうちに衣服がしっとりと湿ってしまう。香をたくと知らないうちに沁み込んだ香気は衣服に移り、やがて服が香気を出す。このように、知らず知らずに積み重ねた日常の小さな体験や経験が、心のあり方に影響することを仏教では薰<sup>くんじゅう</sup>重<sup>じゅう</sup>という。

古人は「霧の中を行けば知らず知らずのうちに衣が湿る」といっている。同じように、立派な人に日頃接していると自分も知らない間に立派な人になるものである。昔一人の少年がある和尚に仕えていた。その少年は、仏法を学び修業した様子もなかったが、長い間立派な和尚に接していたため、自然に道を悟ったのである。(道元)

よく「類は友を呼ぶ」というが、ビジネスの付き合いであれ、プライベートの付き合いであれ、交際相手の人柄はわたし達にもいろいろな影響を与える。温容の人と接すれば自分の心も浩やかになり、エゴイストと接すれば自分の心も狭くなる。

ある人と親しく交際する者は、自分も大きな影響を受けざるを得ない。燃えている炭の傍に消えた炭を置けば、燃えた炭が消えてしまうか、消えた炭が燃え始めるかそのいずれかである。

同じように、人と交際すると自分が影響を受ける危険性は非常に大きいから、親しい交際をすることは用心しなければならない。煤けた人と親しく交際する者は、自分も煤けて黒くなる。(エピクテトス)

#### ——友情は大輪の菊を育てるように——

ところで、真の友情ほど有難いものはない。肝胆相照らした仲だと、何かの行き違いがあったとしてもかえって良い方へ誤解してくれるものである。約束の時間に大幅に遅れた時でも、こちらを責めるどころか、かえって事故にでもあったのではないかと心配してくれる。

何といっても、心に喜びを与えてくれるのは真の友情に勝るものはない。友の真心が待っているところには、何という幸せがあるだろうか。友にはあらゆる秘密を語ることができるし、友と語れば不安は和らぎ、その意見はわたしの決断を促してくれる。彼の明るさはわたしの悲しみを晴らしてくれるし、彼と会うだけで喜びが湧いてくる。(セネカ)

だが、人というのはいつも快活で平常心を保つわけにはいかない。20年、30年と続く付き合いの間には多少の波風が立つことがある。たまには友人の些細ない動に嫌気がさすのは止むを得ない。だから、友情は大輪の菊を育てるように細心の愛情を持って培わなければならない。この俗世界において、真の友情は稀であって貴重なものだとお互いが感じ、それを育む努力を意識的にしなければならない。

ビジネスの付き合いとは違い、友となる人は人柄の良い人に限る。よく何となくウマの合う友というのがいる。心を開ける友というのがいる。ダメな奴だが愛すべき友がいる。実はこのような友こそ最も懐かしい。友はその人柄が大切であって、才能は関係ない。

このような友と終生の友情を続けたいのであれば、利害関係を持ち込まないことが必要である。世の中には長い付き合いだからといって平気で借金を申し込んだり、物を売りつける人がいるが、利害関係を持ち込めば、その瞬間に友情は破綻する。

借金が返せず友に迷惑をかけた場合には、勿論、友情も破綻してしまう。そうでなくても今までの対等の関係が「貸し借り」の関係に微妙に変化してしまう。一方が負目を負うようになると、友情の菊は枯れ始める。そして、枯れた菊が大輪の花を咲かせることは二度とない。

#### ——旧友に愛されずとも——

付き合い知人や友人の良し悪しが自分の人柄まで影響を与えるのだから、漫然と交友を広げるのは好ましくない。あくまでも友人・知人を意識的に選択する細心さが必要である。特に青年時代の友というのは、資質や人柄とは関係なく単に遊び仲間にはすぎないことが多いから、社会人となった後は必ずしも好ましい友というわけではない。

かつての友は現在の友ではなく、かつての友情は現在の友情ではない。

だから、旧知との付き合いも断たなければならないこともある。古くからの飲み友達だからといって付き合いを続けるならば、自分自身の向上は到底無理だと知るべきである。

交際に当たっては、古くからの知り合いや友人と親しく付き合っただけで、その結果、彼らと同じレベルにまで下がり下がるように注意しなければならない。

君は旧態依然の君として旧知の人から好かれたいか、それとも以前より優れた者となってこれらの人から好かれないかだ。もし君が進歩を望むなら、彼らから好かれなくとも優れた者となることを望むべきだ。

君が今までの飲み友達といっしょに飲まないなら、彼らはもう君を好かないだろう。君は飲んだくれとなって彼らに好かれたいか、それとも飲むのを止め彼らから敬遠されるか、そのいずれしかない。

もしも人から「良い人だ」といわれるよりも、慎みとたしなみのある人間であることを選ぶならば、このような古くからの友人との付き合いは避けるが良い。

(エピクテトス)

西欧人の付き合いに比べて、日本人の付き合いはかなりウェットだから、旧友、旧知との付き合いをドライに割り切るのはためられる。だが、20年も30年も音信不通だった友人が突然交際を求めてくる時は、ほとんどの場合ただの懐かしさからではない。

社会にでて全く異なった道を歩いてくると、性格も心映えも変わり、古い時代の友情が復活することはまずない。

商売上利用しようとはいかなくとも、何かの援助を求めて近づいてきたのが分かると、こちら身構えて対処せざるを得ない。そこで助力を断わったりすると、「あいつも変わった」とか、「友情のかけらもない奴だ」などと悪口をいう者もいるが、それは間違いである。変わったのは実は相手である。友情に利害を持ち込んだのは、相手である。

人にはそれぞれの運があり、生き方があり、10年、20年と経つうちには性格も驚くほど変わってしまう。古い友は現在の友ではなく、現在のわたしは古いわたしではない。旧友だからといって特別の配慮や便宜を期待するのは虫が良すぎる。ビジネスを求めるなら、たとえ旧友であろうとビジネス・ライクな交際として再スタートしなければならない。その方がかえって長いビジネスの付き合いにつながっていく。古い友情にビジネスをまぶした交際は偽物であり、いずれ破綻するに決まっている。

#### ——幸運も不運も人を通してやってくる——

さて、交際の恐ろしさは、付き合う人の良し悪しが個人の運命をも変えてしまうことである。幸運も、富も、名誉もすべては人を介してやってくるからである。

作曲家や画家が世の中に認められるのも、必ずその才能を認めた出版社やスポンサーが幸運をもたらすのである。

モーツァルトほどの天才も、ピアノ演奏や作曲で生計を立てたが生活は苦しく、貧困と失意のうちに35歳で夭折した。

シューベルトは「未完成交響曲」や「冬の旅」の名作を作曲し、カイクが絹をはくように1000曲の名曲を残したが、栄養失調とチフスで31歳で死んだ。才能だけでは幸運はやってこない。不遇の天才の例を見ればそのことが分かる。

ビジネスも同様である。どんな素晴らしいビジネス・アイデアを持っていたとしても、それだけでは絵に描いた餅にすぎない。良い出資者、取引先、スタッフ、部下に恵まれなければどんなビジネスも長続きはしない。

このように、人間の幸運も他人との係わり合いの仕方に深く影響されている。家族、親戚、学友、同僚、取引先、その他の知人を含む交際集団が時にはわれわれに幸運をもたらし、時には災害をもたらす。

この交際集団の質の良し悪しが、われわれの運命に影響を与える。だから、われわれは人を

良く観て、交際しなければならない。

## 2 人を観る

人は転ぶと石のせいにする。石がなければ坂のせいにする。坂がなければ靴のせいにする。  
(ユダヤの格言)

### —— 繊細ぶったエゴイストを避ける ——

この喧騒の世に生きていると、われわれは時として静かな隠遁生活を夢見たくなる。だが、われわれはロビンソン・クルーソーのように生きるわけにはいかない。年をとればとる程、世の中に受け入れられれば受け入れられるほど、自分とは異なった個性を持つ多くの人々と付き合わなければならない。それが人生である。

そうだとすれば、対人関係の悩みは人生に必然的なものである。消極的に対応するだけでは、人生の悩みから永遠に解放されることはない。人と人のふれあいの中に、積極的に喜びを求めたいものである。そのためには、明確な方針を持ち定期的に「対人関係の手入れ」をすることが好ましい。対人関係を意識して見直すことは、幸運を呼ぶ第一歩とさえいえよう。

まずは、エゴイストとの交際を切ることである。世の中には自尊心ばかり発達し、些細なことにすぐ感情を害するエゴイストが多い。困ったことにこういった人々は自分をエゴイストだとは決して思わず、逆に繊細な感受性を持った人間であると考えている。

しかし、「繊細ぶったエゴイスト」は、林を渡る一陣の風に耳も傾けず、煌々と輝く蒼い月に<sup>おのの</sup>慄きもせず、人間を超える大いなるものを思索もせず、瞑想と沈思のひとときを持ったことのない人々である。彼らは自我の強い、感受性の鈍い、そして何より優しさに欠けた人々である。

彼らは、自分以外の者はすべて感受性が鈍く鈍感だと考える。彼らにとって、いつも自分が犠牲者であり、他人は加害者である。だから、つねに他人を非難する。自分が他人にかけた迷惑には全く気がつかない。このような厄病神が会話に加わっただけで、たちまち今までの華やかな雰囲気が消え白けてしまう。こんな人との交際は一刻も早く絶つのがよい。

繊細ぶった人間は危険である。ある程度付き合っただけで初めて毒があることが分かるだけにいっそう恐ろしい。彼らは自分が受けた些細な苦痛にはすぐ不平をならし、われわれが彼らから受けた苦痛について一言も反論できない。彼らはいつも犠牲者になりすまし、われわれは加害者ということになる。

繊細ぶったエゴイストは決して自分が悪いとは認めない。彼らは針で刺したような小さな傷でもあれば、それに炎症を起こさせ、悪化させる。それがひどい傷になると、かすり傷を負わせたにすぎない人を傷の下手人であると非難する。

彼らはあらゆる人に向かって愚痴をこぼす。不平をいい、大袈裟に泣きをいう。このような人間に決して誤魔かされてはならない。付き合ってもならない。

(ボナール)

繊細ぶったエゴイストと付き合っていると、自分の幸運までも逃げていってしまう。彼らは、必ず不運と災害をもたらす。だからよくよく注意してこのような人は敬して遠去けることが必要である。

付き合う時はできる限り利己心のない人を選ぼう。なぜなら利己心という悪は知らぬ間に忍び寄って、つぎつぎに人に伝わって害を及ぼすからである。

だから、疫病流行の時のような注意が必要である。疫病にかかっている人や病のため高熱を出している者の傍に座ってはいけない。同じように、友を選ぶには相手の性格に十分注意を払わなければならない。 (セネカ)

見渡せば、けっこうこの「繊細ぶったエゴイスト」は多い。日本人は他人の批判に極めて弱い。個人主義が根付いておらず、他者との対決に慣れていない社会風土のせいだろう。他人が何の悪気のない言葉にも深く傷つく。感情を害し、いつまでも根に持つ。

キッチリとした自分の考えがなく、自立していないから他人の些細な言葉じりにも感情のバランスを崩してしまう。一見、豪放磊落でなかなかの豪傑と思える人にもこの繊細ぶったエゴイストがいるし、苦学力行の苦勞人の中にもけっこうこのタイプの人がいるから気を抜けない。

こんな時には自分を反省するよりも、彼らから遠去かるほうがはるかに利口である。こちらでも多少軽率であったかもしれないが、悪気もない軽口にいちいち目くじらを立てて感情を害されたのではたまったものではない。些細な言葉の行き違いくらいは聞き流すぐらいの心のゆとりのある人でないと、ビジネス上の付き合いも、プライベートの付き合いも長続きしない。どうせ破綻するような付き合いなら、できるだけ逆恨みされないうちに逃げるしかない。それが未然に災害を防ぐ知恵である。

#### ——不平・不満家に近づかない——

不平、不満家にも近づかないほうが良い。誰しも生きていく上で不平、不満がないことなどあり得ないのだから、多少の不平はぐっと呑み込んでしまうぐらいでないと、快適な人生を送ることなど到底不可能。だが、世の中にはなんと口さがない不平家が多いことだろう。

小雨が降っているなら傘を広げれば十分だ。「またいやな雨だ」といったところで何の役に立とうか。雨も、雲も、風もどうすることもできない。「ああ結構なおしめりだ」となぜいわないのか。そう考えれば体も暖まるだろう。

人間の場合も同様に考えたまえ。それは雨の場合よりもっと簡単なのだ。なぜならニコニコしても雨はどうにもならないが人間には大いに影響するからだ。微笑む真似をただけで人間の悲しさや不快は少なくなるものだ。（アラン）

職場でも家庭でもいつも不満ばかり洩らす人をけっこう見かける。自分はいい加減な仕事しかしていないのに、他人には完全な仕事を要求する人がいる。不満の矢を他人に向けて、上司や同僚を悪しざまに批判する人がいる。また自分の職分が侵されたと感じて些細なことに目をつり上げて人を非難する者もいる。

このような人でも、組織の中ではそれなりの地位を占めることができる。なぜなら、他の人たちは不平家といちいち争っている暇もなく、争えば無用なトラブルに巻き込まれるので、自然と誰も逆らわないようになるからである。

だが、絶えず不平、不満をいう人は他人を不快にし、自身も幸福から見放されることになる。このような不平家に青い鳥は決して訪れない。

世の中には、いつも文句の種を探している「人間の形をした自動機械」がいる。こういう人には少しも喜びがない。なぜなら、周囲の人が不幸な人を尊敬しないのは当然だからである。だから、そういう人は木の葉と同様、風に吹き飛ばされてしまう。外部に不平の種を探す人たちは決して物事に満足できないのに反して、自分の誤りを率直に認める人々のかえって物事を楽しめる。（アラン）

誰しも単なる不平・不満家を好まない。言葉は心の内面を表わすものだから、口汚く他人を罵る人は自分の心も汚いことを告白しているようなものである。人はますます離れていく。世の中に不満を抱いてつねに他人を批判する人は、慢性不満症ともいべき病にかかっている。現状を解決するための具体案を伴わない「批判」は、しばしば「ひがみ」「やっかみ」と同義である。問題は外にあるのではなく、実にしばしば自分自身にある。彼らはそのことに気付かない。

自分はいつも忘恩、不親切、裏切りの犠牲になっていると称するタイプの人がいる。このタイプの人是非常にもっともらしい口のきき方をする。そして人々の温かい同情を獲得する。

彼らの話の一つ一つは全くもっともらしい。彼らが不平をこぼすのももっともなのだ。だが、やがて彼らの話を疑わざるを得なくなる。なぜなら、彼らが出会った悪者があまりにも多過ぎるからである。他の人も彼らと同じように悪人に出会いそうなものである。だが決してそうではない。だから、このような犠牲者の説明するとおりには他人から虐待を受けたとすれば、その原因は彼自身にあると考えられるのだ。

つまり、彼らが小心で想像上の被害を受けたのか、それとも彼らが他人を苛立たせる仕方で振る舞ったかのいずれかである。だから世慣れた人たちはいつも世間に虐待されていると称する人に疑いの目を持つようになる。(ラッセル)

世の中の人がことごとくあなたが考えるほど愚鈍であり、嘘つきであり、悪者であろうか？ 逆にあなたはそれほど誠実で、正直で、聡明であろうか？ そうではあるまい。自分を中心にしか物事を考えないから、そう見えるだけである。

また仮に世の中にそれほど悪者が多いとしても、嘆いてみてもはじまらない。われわれはただ、現実をそのまま受け入れなければならない。現実を受け入れたうえで、具体的対案を考えるべきである。対案のない不平、不満は不幸と災いの友である。

#### ——運を捨てている人々——

世の中には自分の不運を嘆く人がけっこう多い。だが、よくよく観察すると、これらの人々には運がないのではなく運を捨てているのである。勿論、本人はそのことに気が付かない。

満員電車などで見る例だが、わずかのスペースを見つけて強引に席に座ろうとしたり、電車がホームに入ると列を崩して横から割り込む。これなども一見得をしているようだが、その実失っているものは大きい。

このような小さなエゴを追うと、心はますます狭くなり、利己的になっていく。電車の席を争って小さなエゴを追う者は、その他の場面でも必ず功利的に行動する。小さなエゴイストがいざという時に心浩やかに振る舞うことは決してない。このようにして、エゴイストは大切なものを毎日失っていく。

世間は、けっこうよく人を観ているものである。このような小さなエゴイストは自然と敬遠される。大いなる幸運がやってくることはあり得ない。ただ、本人は運を捨てているとは夢にも思わない。かえって、「世の中が悪い」といつも悲憤慷慨しているのがおかしい。

運を捨てている人々には共通の特色がある。些細なことにイラつき、感情家で、小心で、陰気で、自我が強いくせに努力をしない。節制、克己、努力、快活とは全く無縁の人々である。

このような人々は、自分の運を捨てているだけでなく、人を不幸に引きずり込む。

この前も運を捨てているタクシー運転手に出会った。夜の最終バスもなくなったので、わたしは国電の駅からタクシーに乗った。自宅までわずか470円の区間だが、持ちあわせがなかったので5000円札を差し出した。すると、この運転手はブツブツといいながらおつりを差し出すのである。「こんな最短区間を乗って5000円も出されたんじゃない。まいったもんじゃない。」

彼は自から運を捨てている良い見本である。おつりがあるなら黙って出せばよいのに、言わずもがなの文句をいって、自分も不快になり、他人も不快にする。このような運転手と、いつも愛想よく客と応対している運転手とでは売上げが違ってくるのは当然だろう。それが半年、1年、3年と積み重なれば、運を呼び込む人と、運を捨てている人との差は開く一方となる。

だから、運を捨てるような人と交際してはならないのである。このような人は、その性格、考え方、心の持ち方に偏りがあるから、不運なのである。このような人と付き合うと、自分の運まで影響を受けてしまう。

### 3 争論<sup>ひがごと</sup>は僻事なり

賢い人でも、無知な者と争うと無知に陥ってしまう。(ゲーテ)

——この国には小人多し——

道元は、いうまでもなく曹洞宗の開祖であり、日本の生んだ最高の禅僧である。

このお坊さんの面白いところは、禅という一見非論理の道の探求に一生を捧げながら、その思考は日本人には珍しいほどに論理的、理知的なことである。よくいわれることであるが、ストア哲学と禅は共通点が多く、道元の考えも西欧的思考に近い。

だが、知の最高峰ともいえる道元も、人との交際にはほとんど悩まされたらしい。弟子の懷奘が書いた『正法眼蔵随聞記』には、いかに道元が人との交際に悩んだかを偲ばせるエピソードが多い。道元は繰り返し繰り返し弟子に注意している。

小人は他人のちょっとした言葉じりにも傷つき、腹を立て、恥をかかされたと思うものである。そして折をみては仕返しすることを考える。この国には小人が多いからくれぐれも気を付けなければならない。

道元は青春の4年間を宋(中国)に留学している。そこで異文化に接した道元にすれば、日本人がいかに情緒的で非論理的に見えたに違いない。小心で、尊大で、鼻持ちならない輩が多いのに辟易したに違いない。

だが、このお坊さんは一面凄まじいリアリストでもあった。現実には愚人・小人が世にあふれている以上、その現実に対処せざるを得ない。相手が間違っているとしても決めつけてはならないし、相手の感情を害しないよう言葉遣いに気を付けなければならない。

他人の間違いをすぐさま顔に表わし、決めつけてはならない。相手が腹を立てない言葉遣いをすべきである。荒い言葉を使うと、正しい法でも長続きしない。



わたしが建仁寺にいた頃、多くの人々と仏法について話す機会があった。人々の解釈には間違いがあったが、わたしはただ仏法の話をして相手の間違いは指摘せず何事もなく済ませた。愚かで自分の考えを固執する人は、自分の間違いを指摘されると腹を立てる。知恵がある人は、仏法の意味を理解すれば自然に改めるものである。こうしたことをよく心得るべきである。

### ——道元の反省——

道元には、このように世慣れた一面があったが、若い頃の道元は実はたいへんな論争家であった。彼は飽くなき求道心と倫理的な潔癖感を持っていたから、墮落した僧や、反対派の僧には厳しい批判を加えている。

たとえば、日本の高僧たちは悉く「土<sup>つち</sup>瓦<sup>がわら</sup>」のようなものであるとか、彼らが教えたことはすべて生半可で未熟であると、先輩の僧たちを舌鋒鋭く批判している。

さらに宋で会った禅者を「邪教の徒」とか、「無知無学の輩」とか、「バカ者」とであると仮借なく決めつけている。道元が留学した当時の宋では、低次元のセクト争いを繰り返していたから、道元の批判も確かに理がある。だが、この批判の鋭さはやはり日本人離れしている。

このように若き道元は類い稀なる論争家であった。自己の進むべき道を確認し、それに反する者は峻拒し、徹底した批判を加えた。だが、多くの論争を経験するにつれ、道元は論争の限界に気が付くようになる。そして悟る。

「争論は定まりて僻<sup>ひがごと</sup>事なるべし」。

人と論争することなど全く無駄である。自分のためにも相手のためにも、そんなものは結局無益なことなのだという。

君子の力は牛よりも優れているからといって、牛と争うことはしないものだ。このように、自分は法を知り人よりその学才が勝れていると思っても、相手と議論してはならない。

自分に理屈があり、相手の間違いが明らかな場合でも、理屈で相手をいい負かすのは良くない。そんなことをすれば、相手は根に持つだけだ。

だから相手をやり込めず、かといって自分の間違いにするわけではなく、何事も適当にしておくのが良いのである。相手のいうことも聞こえない振りをして適当にしておくことが何よりも大切な心得である。

正しい法を世に広めることを終生の願いとした道元も、議論によって人が納得するものではないことを知った。議論をする自分の心の中にもやはり勝ちたいという名誉心とか虚栄心がある。だから、議論などしても何も良いことはない。議論で勝ってみても、負けた相手は逆恨みするだけである。

物事は、いつもはっきりさせれば良いというわけではない。必要な時には曖昧にすませるのも一つの知恵である。

論争を回避するのは潔<sup>いさぎ</sup>よくない気もするが、よく考えてみると、われわれの信念とかいうものは実は極めてあやふやなものである。

ラッセルは、われわれの信念の多くは「仮装された欲望」の現われにすぎないと考えた。多くの人は自分の信念は確固とした、合理的な根拠を持つと信じているが、実は信念と称するものも欲望の具体的表現にすぎない。夜見る夢は、われわれの願望を表わしているが、われわれの信念も昼に見る夢、つまり白昼夢であるという。

信念とは裏返した欲望である。だから、純粹に論理に従った論争などはまず稀で、ほとんどの論争は実は欲望と欲望の争いということになる。だから論争は、つねに不毛に終わるのである。

世の中にはよく「話せば分かる」などとしたり顔でいう人がいるが、こういう人は人間のうわっ面しか見ていないに違いない。「話せば分かる」などとは、子供じみた幻想である。論争は名誉心や虚栄心のかかった自分と他者の争いである。

学問上の論争でさえこうなのだから、まして日常生活でまともに人と議論するのは避けるのが賢いやり方である。議論に勝っても、苦い後悔のみが残ることになる。こう説いたら、「あなたのようないい加減な生き方はわたしにはできない」などという人がいた。しかし、こういう人に限って、些事に自己を貫き大事には妥協するのがおかしい。

### ——真実をいう者は嫌われる——

道元と同じくパスカルも議論の愚を、繰り返し指摘している。

他人がわれわれの欠点や間違いを指摘してくれるなら、彼らはわれわれに良いことをしてくれているのだ。彼らはわれわれが知らなかった自分の欠点を教えてくれたのだからむしろ感謝すべきである。

だが、実際にはわれわれは相手に腹を立て、敬遠するようになる。われわれは実際の値打ち以上に自分を見てもらいたいから、真実を告げてくれる人々をかえって嫌う。だから真実をいう人は、結果的には人に嫌われ損をするのだ。

人は自分の至らぬ点を指摘されると、かえって逆恨みするものである。それが人の実態である。人間は 99 パーセント感情の動物である。理屈で責められても、心は絶対に納得しない。他人から欠点を注意され、「なるほど」と納得し、みずからを改めることなど滅多にない。あえていえば、理屈や論理などでこの世を動かせるはずがない。感情と利害に合ったものだけが人を納得させる。

だから、人に注意しなければならない時も、間違いをことさら些細なようにいたり、誉め言葉をまぶしたり、笑顔で注意しなければならない。それは生きていくためには必要なことである。なぜなら、真実は聞く者にとっては有益であるが、いう者にとっては不利だからである。

わたしは他人の感情に逆らわないようにいつも心掛けている。「確かに」とか、「疑いもなく」とかいった言葉もいっさい用いない。そのかわり「わたしの考えでは…」とか、「今のところはこう思えるのだが……」と切り出すことにしている。

相手が間違っている、すぐさま相手をやり込めるのは差し控えて、「なるほどあなたのいうことはもっともだが、この場合はちょっと当てはまらないのではないか」といった具合に切り出す。このように、控え目に意見を述べると相手も納得するようになり、反対者も少なくなった。(ベンジャミン・フランクリン)

#### ——沈黙で失敗する者はいない——

スイスの生んだ法律家で哲学者でもあったヒルティは、相手に反論するよりは沈黙を守ることによって難局を切り抜けた。その名著『眠られぬ夜の為に』の中で彼はこう語っている。

「沈黙で失敗する者はいない」。この風変わりな言葉は社会的成功を収めたわたしの親友が口にした決まり文句であった。実際、不愉快ないざこざも、沈黙を守ることにより容易に切り抜けることができる。

逆に自分の意見をいうことは双方の食い違いをいっそう際立たせるだけで、時には収拾のつかない混乱をもたらしてしまう。「よく考えておきましょう」というのも、感情の激しやすい相手や気分の変わりやすい人には奇跡的な効果がある。また、返事したくないことには答えず放置しておくことが、不愉快な議論を打ち切る良い方法である。

人との付き合いでは、ほど良い沈黙を守ることが大切である。

幼児の会話は、「ボク」と「わたし」中心の一方通行である。男の子が「ボクは七五三に行くんだよ」といえば、相手の女の子は「わたしはリカちゃん人形を買ってもらったの」と答える。このように、幼児の世界は「自分」を中心としたすれ違いの会話である。

大人になっても、あまりに自分を語る者は未熟の証拠である。人は成長すればするほど、余裕を持って会話を楽しめるものであり、必要な場合は自分を語ることを差し控える。

だから、日本に比べるとはるかに理論と論争を重視する西洋社会においても、一流の知性は目じりを決して論争することなどしない。たとえ相手が間違っている、相手を責めてはならない。相手を咎めてはならない。意見は穏やかに主張すればよい。そんな態度の中に、個

人の人間性や人格が見えてくる。

激論は勇ましいが何も生みはしない。癒し難い傷を残すのがオチである。激する相手には沈黙を守る他はない。それが人生をより良く生きるコツである。

悪いものを悪いといったところで、いったい何が得られるだろう。本当に人の心を動かすつもりなら、決して非難してはいけない。人の間違いなど気にかけず、良いことだけを行なうようにすれば良い。大事なものは、破壊することではなく、人が喜びを覚えるようなものを建設することだ。（ゲーテ）

まことに、交際の秘訣は、相手の好意を得ることであり、相手を非難することではない。ゲーテのように洗練された交際を楽しみたいものである。

#### 4 和して同ぜず

わたしは名声を恐れる。なぜなら、名声は人の自由と休息を奪うから。（デカルト）

##### ——モンテーニュの浅い交際——

多くの人が親しい付き合い、深い交際が好ましいと思いがちだが、これは日本人の誤解である。われわれは毎日多くの出会いを経験するが、一生の心の友に出会うことなど滅多にない。ボナールのいうように、たいていの人にとって人間など似たりよったりである。多くは相手が自分に便利だとか、利益になりそうだと感じて交際する。だから、その人の内面ではなく地位に注目する。お互いに相手が自分に与えてくれそうなものを計算しながら相手の魂胆を見すかし、胸の内で取引を考える。そして、表面上は握手をするが、利害が反すると友情の旗を焼き捨てる。

辛口のモラリストのラ・ロシュフーコーは辛らつな皮肉をいう。

「世にいう友情などは一種の利害関係にすぎない。利害関係をオブラートに包み取引をするだけのことである」。

この皮肉をいちがいに否定できないのは、それが多分の真実を含むと人々が感じるからである。

人の一生を考えてみるとよく分かる。青年期、壮年期と個人の経済価値が高まるに従い、交友関係も増え、老年に至って経済価値も低くなると交友も減ってくる。

日頃よく付き合う会社の仲間も一見仲の良い友人のようであるが、話の内容といえどもっぱら仕事の話や上司の噂話というのでは、とても真の友情というにはほど遠い。

ビジネス絡みの話しかしないのは、その交際は基本的に利害関係にすぎないことを物語っている。だから、仲間が転職したり、左遷されたりすれば付き合いもそれまでということに

なる。

青年時代ならいざ知らず、ひとかどの社会人になれば無私の友情を信じてはならない。友情という濃密な関係よりも、むしろ淡々とした交際こそ最も望ましい。全人的交際よりも「浅い交際」が望ましい。

食事を賑わすためには思慮深い人よりも面白い人を招くに限る。議論の仲間には高潔な人よりも才能ある人を選ぶ。わたしは目的に合った交際だけをして、それ以上深い付き合いをしない。

かかりつけの医者や弁護士がどんな宗派に属していようと、わたしにはどうでもよいことだ。医者や弁護士がその職務を果たしてくれれば、彼らの個人的問題はわたしと何の関係もない。

召使いとわたしの関係も同じである。召使いは勤勉であってくればよく、わたしは彼らが純潔であるかどうかを問わない。料理人は料理の腕さえ良ければ強情でもかまわない。(モンテーニュ)

モンテーニュはこのように日々付き合う人がその職分さえ果たしていれば、個人の内面については深く立ち入らなかった。言い方を変えれば、最低必要な付き合い以上の個人的交際に立ち入らなかった。浅い交際がふさわしい人々とは、それを越えた深い付き合いはしなかった。

このような考えはあまりにドライ過ぎるように思えるが、そうではない。「上善は水の如し」という諺にもあるように、洋の東西を問わず淡々としたクールな付き合いがかえって長続きするのである。ほどの良い付き合いこそ本物の付き合いである。

#### ——内むなしくして外従う——

病とか死とかいったものは別として、人間の多くの悩み、苦しみ、怒りは人と人との付き合いから生じる。良き友、良き知人は喜びをもたらすが、交際はまた多くの悩みをもたらす。嫁と姑、親類、上司と部下、同僚の間で噂話、悪口、非難が飛びかい、人の悩みの種は永遠につきない。

対人関係の悩みは、人の個性がすべて違うことに由来する。個人の性格、年齢、教育、感情と理性のバランス、物の見方、権力志向の度合、感受性の濃淡、政治的心情、宗教的心情などおよそすべてが異なる。人には個性がある、まさにこの事実の中にこそ対人関係の悩みの根源がある。できれば人間関係の軋轢を避け波風の立たない交際をしながら、一方ではビジネスの業績も上げたいものである。

よく「和して同ぜず」といわれるが、どうもこれが最善の社交法らしい。つまり誰とでも幅広い話ができ、相手のいうことを理解するが、自分には確固とした考えがあるから安易に妥

協しない。相手と親しみ、打ち解けて交際はするが、自分の考えを曲げてまで簡単に相手に賛成しない。

「和して同ぜず」とは論語の中の言葉であるが、道元も処生のコツは「内むなしくして外従う」だとしている。実力や徳もないのに世間にでて人から崇められてはならないが、逆にことさら身を捨てて世間に背く風をしてみせるのもわざとらしい。

だから、表面はただ世間の人と同じように生き、心の内では自分に対する執着を捨てるのが良いのである。心を浩やかにし、あえて人のいうことに異を立てない。相手のいうことを理解するが、自分の説は曲げない。このような付き合い方こそ交際の原点であろう。

### ——付き合いの距離の取り方——

さて、そんな時に大切なのが付き合いの距離の取り方である。他人との場合はおのずと一定の距離をとるからまだよいが、夫婦、親子、兄弟、親友、それに会社の同僚などは気がおけないだけにかえって間違いやすい。親しければ親しいほど、気がおけなければおけないほど、一定の距離をとって接しなければならない。

親しいとついあからさまに文句をいったり、真正面から批判したり、相手の欠点を笑ったりしがちだが、これは厳に慎まなければならない。

特に身内だと、ついブレーキがきかず時には激して決定的な言葉を投げつけることがあるがこれは最悪。他人ならば喧嘩別れですむが、身内は別れるわけにはいかないから、表面的な偽りの和解ができて、不満の火はくすぶり続ける。

このようなことが幾度となく重なると、やがて些細な言動がきっかけとなって激情がほとばしり破局が訪れる。

他人との争いとは違い、我慢に我慢を重ねたうえでの破局だから、悲劇的な結果になりがちである。それというのも、身内だからとつい安心して、距離を取ることを忘れるのが原因である。だから、身内の場合も他人の場合と同様、一定の距離を取って接することが大切である。それが一人の人間として、相手の個性と人格を認めることである。

大切なのは、自分の意見の押し売りをしないことである。よく小さなことで、自分の意見を押しつける人がいるが、これなど最も下手な接し方である。なぜなら日常の些事こそが人生の大半を占めているからであり、些事についてこそ人は確固とした意見を持つものだからである。

ある人の入浴が短い時には「彼は風呂に入っているのが短い」とだけいうべきで、「彼は悪い」と批判してはならない。

同様に、ある人が酒飲みならば「彼はたくさん酒を飲む」といえばすむのに、「彼

は悪い」と批判すべきではない。人にはそれぞれ人の考えがあるのであり、彼らの事情を知らずにそれを悪いと批判することはできない。（エピクテトス）

西洋人が納豆やたくあんの味を分らないからといって批判するのは間違いである。これらは単に趣味の問題であり、良いか悪いかの問題ではないことは誰にも分かる。同様に、日常生活のほとんどの事柄は実は好みのものであり、良いか悪いかの問題ではない。些細な事柄についても、人には人の考えがあるのであり、生き方もあるのだ。

親が子供にお菓子を与えなければ、子供はやがて隠れて買い食いをするようになる。遅く帰宅した夫に妻が口喧しく文句をいえば、夫の帰宅はますます遅れ、外で遊ぶようになる。人は容易に自分の考えを変えはしない。批判や忠告をすれば分かってくれると思うのは、人間音痴の考えである。

この点を理解して、身近な者にも節度を持った対応をしなければならない。この知恵を日常生活に活かせば、実り豊かな人間関係を楽しむことができるだろう。

#### ——交際を断つのは自然の冷却に委ねる——

人にはそれぞれの個性もあり、考えもある以上、すべての人から良く思われることはあり得ない。一般に、あまりに付き合いの良い人というのは、意志が弱いか、お調子者かのいずれかである。こういう者は、ちょうどコウモリみたいな人間で、あちこちに保険をかける。そして結局は誰にも信用されない。アリストテレスのいうように「多くの友人を持つ者は、一人の友人も持たない」。

さらに、世の中にはどうしても避けなければならない人々がいる。エゴイスト、不平・不満家、ツキのない者、口舌の徒などとの付き合いは断たなければならない。このような人は、必ず災害と不幸をもたらす。

しかし、交際を断つには、それなりの方法があり、喧嘩別れは避けなければならない。気まずい行き違いがあり、大喧嘩をしたうえ交際を断つなど大人のすることではない。そんなことをしたら、相手に一生恨まれる。

だから、交際を断つにはごく自然に疎遠になるのが良い。「自然の冷却」に委ねるのが良い。あの敬虔なキリスト教徒で、温和と中庸な人柄で知られ、およそ人と争ったことなどないのではないかと思えるヒルティでさえ、別れのノウ・ハウを語っている。

やむを得ず旧友や親類などの親しい者と交際を断たなければならない時は、何もいわずに自然に断つのが良い。わだかまりの種となったことについて議論などすれば、かえって苦々しさや醜さを増すだけである。そうでなければ、別れるよりもっと悪い中途半端な見せかけだけの偽りの和解に終わることになる。

ある者は、一生に一度の離婚をするのに刃傷沙汰を起こすが、他の者は何度も離婚を繰り返しながら別れた配偶者から懐かしがられる。「別れ上手」ということも生きていくうえには必要なことである。

賢人は望ましくない交友を断つ時は、自然の冷却によって断つのである。相手の招待は先約を口実にしてえん曲に断わり、受け取った挨拶状への返事も敢えて出さず、知らず知らずに相手との接触の回数を減らして、ついには交際を断ってしまう。このような自然の冷却による別離の方が、激情による別れよりはるかに好ましい。

### ——社交は自由を奪う——

最後になったが、行き過ぎた社交は害悪をもたらすことを肝に銘じたい。日本社会はコネ社会だから、交際が広ければ広いほどよいような幻覚に囚われやすい。最近、企業横断的なビジネスマンの会が隆盛であるが、これもよほど気を付けないと単なる徒労に終わってしまう。

毎日を人との付き合いに忙しく、充電する機会を持たなければ、知力は後退してしまう。社交に淫すると、余暇を楽しむ時間も心を養う時間も失ってしまうから、薄っぺらな深みのない人間になってしまう。

交際をいくら広げても、尊敬できる師、信頼できる友人には滅多に巡り合わない。ただ精神的、肉体的な徒労が残るばかりである。わたしの経験では、よい人との出会いは全くの偶然で、意図的に交友を広げたからといって出会えるものではない。わずかばかりのビジネス・チャンス求めて、交際を広げるのは時間の無駄である。

交際というものは非常に時間を食うものだから、一般に非効率的なものである。モンテニユのように、交際に何を求めるのかははっきり自覚していないと、振り返ってみてただ壮大な無駄だったことに気づくのがオチである。

社交に投入する時間を、勉強や運動や趣味のために使った場合と比較してみるとよい。何百時間かを費やせば、趣味を開発して人生を豊かにできるし、運動のために使えばストレスも減る。3000 時間も 1 つのことに集中すれば、世の中で通用するプロになれる。自己啓発をなおざりにして、ただ交友を広げることに熱中するのは本末転倒という他はない。愚かなことである。

ヒルティは、社交の害をよく知っていた。絶え間ない社交を続ければ、精神さえ衰えてしまう。

何事についてもそうだが、社交についても節度を守らなければならない。絶え間なく人と交際していれば、誰も精神的害を受けずにはすまない。



キリストでさえ、時には人との交わりを避けて神に祈らなければならなかった。いつも大勢の人に取り巻かれている神父たちの場合も、やがて彼らの精神力は衰えてしまう。

このように、絶え間なく人と交際するとついには自分さえも失ってしまう。自分が自分の生活をコントロールするのではなく、他人が逆に自分のスケジュールをコントロールし始めるようになる。だから社交は、わたしの自由さえも奪う。社交の恐ろしさである。

### ——デカルトの隠遁と死——

社交のもたらす害を身にしみて知っていたのはデカルトであった。

20 代前半から 9 年間、彼は「世間という書物」を学ぶためデンマーク、ポーランド、ドイツ、オランダなどヨーロッパ各地を放浪する。29 歳の年にパリに帰ったデカルトは、2 年間社交サロンに出入りした。

デカルトの付き合った人々は、桁のはずれた天才が多かった。小説家のバルザック、思想家のパスカル、哲学者のホブズ、神父のメルセヌなど当時の一流の知性人であった。メルセヌはフランシスコ修道会の神父であったが、研究者の知的交流を図るためにメルセヌ・アカデミーと呼ばれた知的サロンを設けた。これが後のフランス科学アカデミーの前身である。

しかし、一流の知性との社交にも、デカルトはそれほど心を魅かれなかったらしい。かえって、煩わしいパリの雰囲気はデカルトは嫌った。騒々しい社交のうちに何をも見出さなかったデカルトは、オランダに隠遁しそこで 32 歳から 53 歳までの壮年の 21 年を過ごした。

デカルトは、「よく隠れたる者はよく生きたり」という格言を生活の信条としていた。煩わしい世間の問題に巻き込まれて、貴重な自由を失うことを恐れた。彼はメルセヌ宛の手紙で次のように述べている。

「誰かがわたしに好意を寄せてくれるのがいっこうに嬉しくない」などと思うほどわたしは世間嫌いではありません。だが、わたしは好意を寄せてくれる人よりもわたしに全然かまってくれない人の方がはるかに好ましいのです。

わたしは名声を望みますが、それ以上に名声を恐れます。名声は人の自由と休息を奪うからです。わたしは自由と休息をこのオランダで完全に得ています。どれほど金持ちの王様でも、わたしの自由と休息を買いとることはできません。

デカルトにとって社交は有害であった。人生における自分の進むべき確かな道を知る者にとって、社交など無用のことであろう。道元も同様である。仏法の修業という自分の使命を

知る者にとって、社交などという夾雑物は無用のことであった。  
だから、社交にうつつを抜かす人々は未だ人生も知らず、鮮烈な使命をも見出せない人々であるともいえる。

だが、運命の皮肉というか、デカルトは自分の信条に反した死を迎える。

『方法序説』や『省察』を出版した後、デカルトの名声はにわかに高まった。世に注目され始めると共に、デカルトはさまざまな論争の渦中に巻き込まれる。「デカルトは無神論者の危険な思想家である」と非難され、自由の国オランダも次第に住みにくくなった。

そんな時に、彼はスウェーデンのクリスティーナ女王からの招きを受けた。この男まさりの女王はデカルトの著作に感動し、スウェーデンに来て自分に講義するように要請したのである。デカルトは気乗りしなかったが、女王は招へいのためわざわざ軍艦まで派遣してきたので、さすがに断わり切れず、彼はスウェーデンに向かった。

クリスティーナ女王は国務に煩わされない自由な時間にデカルトの哲学の講義を聞きたいと望み、毎朝5時から彼を王宮に招いた。体の弱いデカルトには、この朝の講義は辛い務めであった。無理がたたったのか、ストックホルムに来てからわずか3ヶ月目にデカルトは肺炎にかかり、病床について9日目にあっけなく世を去った。

社交を嫌い、自分の研究に没頭したデカルトは、あまりにも輝かしい研究成果のため、逆に世俗の波に巻き込まれ、53歳という若さで一生を終えたのであった。